

## 研究報告

奈良文化財研究所 アソシエイトフェロー  
マレス エマニュエル 氏

ご紹介にあたりました、マレス・エマニュエルです。今日は、皆さんと一緒に登壇することができて、本当に光栄に思っております。ご期待に添えるような発表ができるかどうか分かりませんが、今日のシンポジウムのテーマとなった「庭園－その歴史と美意識をよみ解く」について簡単に発表をしたいと思います。

先ほど渡辺先生は外国に住んでいる日本人の観点からお話されましたので、私は日本に住んでいる外国人という観点から発表してみたいと思います。じつは、京都工芸繊維大学を卒業してから、私は日本で、日本庭園史の研究に没頭してきました。その中でも、私がいっとも興味があるのは、20世紀に活躍した歴史家たちの庭園観と歴史観です。彼らはどういう基準や考え方、言い換えれば、どういう美意識で日本庭園の歴史を評価し、編纂をしたのか。そんなことを理解しようとして研究を進めています。

今日は二人の有名な歴史家であり、また作庭家でもあった重森三玲と森蘊に焦点を当てたいと思います。同じ時代を生きて、そして同じ資料や同じ庭園を調査したのに、二人はまったく違う解釈、まったく違う日本庭園像を描いたので、対照的でわかりやすい事例になるかと思います。一番最初にその二人の違いを注目したのは、造園学者の白幡洋三郎先生です。1994年に出版された本『江戸の大名庭園－饗宴のための装置』の中で、次のように紹介しました。

「重森三玲は庭園史界の在野の大御所である。(中略) 森蘊は奈良国立文化

財研究所に長く勤め、大学でも日本庭園史を講じた。造園の研究では学会の大御所である」。

つまり、重森三玲と森蘊はまったく違う立場から庭園の歴史を語ったということです。重森は独学で日本庭園の歴史を学び、アーティストとして日本庭園を作りました。それに対して、森は東京帝国大学を卒業して、学者として歴史的な庭園の復元・整備に携わった人です。

皆さんはご存じかと思いますが、重森三玲の旧宅庭園は15年ぐらい前に「AQUOS（アクオス）」というテレビのCMで紹介されてから注目を浴びることになり、その後は本や雑誌、テレビでもよく紹介されてきました。だから、現在重森三玲は庭の作者として認識されていますが、じつは庭を作るよりも前に、重森三玲は歴史家として『日本庭園史図鑑』という偉大な業績を残しています。戦前に3年かけて、青森から九州までの歴史的な日本庭園300件以上を調査して、26巻でまとめました。1年に8冊の本を出版するような、巨人的な仕事ぶりです。その中に、庭園の作者や様式などに関する解説だけではなく、図面、スケッチ、写真なども収録されていますので、今となっては非常に貴重な参考文献です。

独学で歴史を学んだ上で重森三玲は自分なりに庭を作り始めました。デビュー作となった東福寺方丈の庭園は今でも彼の一番有名な作品かもしれません。方丈の四方に枯山水を作りましたが、そこに斜めの線を取り入れたり、または市松模様を崩したりするような、斬新でモダンなデザインでした。

戦後以降、重森三玲は全国にたくさんの庭を作りました。例えば、東福寺の龍吟庵では雲の中を飛んでいる龍を、大徳寺瑞峯院庭園では荒い海の中にそびえ立つ蓬莱山を表現しました。庭園のテーマはいつもそのお寺や場所にちなんで、または日本の伝統からヒントを得て、新しい表現を試みました。過去に学んで、新しいものを作るというのはアーティストらしい姿勢です。そして、庭を作る時にはセメントなど、これまで日本庭園で使われてこなかつ

たような材料も恐れずに使いました。彼のモットーは「永遠のモダン」でした。

とにかく、重森三玲が全国で作った庭を振り返ってみれば、枯山水が多いです。いずれも非常にデザイン性が強い、絵画的な庭を作りました。白いキャンバスに絵を描くと同じような感覚で、庭を作りました。もちろん、全国の歴史的な庭園を調査した時、いろんな時代やいろんな様式の庭を見てきましたが、彼にとって、日本庭園の最高峰は室町時代の枯山水でした。特に龍安寺庭園を高く評価していたようです。白砂の中に 15 個の石を配置するこの平庭こそ、絵画的な庭園であり、「永遠のモダン」でした。一木一草もないので、作られた当初からほとんど変わっていないと思われる庭園です。

じつは、若い頃の重森三玲は画家になりたくて、東京の芸術大学に勉強しに行きましたし、下の名前もフランスの画家ジャン＝フランソワ・ミレーにちなんで改名をしたというぐらい、美術、とりわけ絵画が好きだったと思われます。結局は画家ではなく、日本庭園の作者になりましたが、室町時代の枯山水を理想として、絵画的な庭を作ることになりました。

それに対して、森蘊は一般的に知られていません。学者ですので、本や論文はたくさん残しました。また、京都では法金剛院庭園や浄瑠璃寺庭園、奈良では円成寺庭園、平泉では毛越寺庭園や観自在王院などの歴史的な庭園を復元整備しました。言い換えれば、森蘊は脚光を浴びることはありませんが、われわれが見ている多くの日本庭園に大きな影響を与えた人です。先ほど、鈴木先生のご講演でも紹介された、平安時代の庭園研究の第一人者です。

森蘊は学者として、徹底的な文献資料収集や分析と、精密な現地調査の結果を照らし合わせて研究を進めていきました。その方法を「復原的研究」と名付けました。森蘊の研究の特徴の一つは、その実測図に見られます。植物はあえて排除して、その代わりに地形と石の配置や形に最新の注意を払いました。つまり、庭園の図面に等高線を取り入れて、厳密な平面図や断面図などで庭園の起伏を表現しました。

もう一つの特徴は、先ほどの鈴木先生も紹介されたのですが、発掘調査です。

今となっては当たり前のことですが、戦前は庭園の修理をしても、発掘はあまりされていなかったのです。しかし、森蘊は必ず発掘をしてから復元整備を行いました。庭園の「原型」を探すためであり、また科学的な根拠による「復元」をするためでした。発掘前と整備後の図面を報告書にまとめて、貴重な資料をたくさん作りました。簡単に言うと、森蘊は現代の庭園史学の基盤を築いた人です。

こうして、森蘊は法金剛院で4メートルほどの高さのある滝石組みや、毛越寺庭園では80メートルほどの長さのある遣水を発掘して、復元整備しました。いずれも庭園史上の大きな発見でした。

法金剛院、観自在王院、円城寺、浄瑠璃寺、毛越寺など、森蘊が復元整備した庭を並べてみればあきらかですが、彼にとっての日本庭園の最高峰というのは平安時代の寝殿造庭園や浄土式庭園のような池庭でした。要約しますと、重森三玲も森蘊も同じ時代に活躍し、同じ日本庭園の歴史を研究テーマとしましたが、前者は室町時代の枯山水を理想として、後者は平安時代の池庭を理想としていたわけです。

その二人の庭園観・美意識の違いをよく理解するために、一つの興味深い事例を取り上げたいと思います。小堀遠州という庭園の作者です。皆さんはご存じかと思いますが、小堀遠州は江戸初期の大名であり、幕府の作事奉行、そして伏見奉行を務めた人です。江戸幕府のキーパーソンではあったのですが、それ以上に、茶匠として、書家として、そして庭園の作者として、いわゆる総合芸術家として歴史に名を刻んだ人です。

小堀遠州は全国にたくさんの庭を作ったと言われていますが、その中でも伝説が多いです。とりあえず、今日は京都に残る二つの事例を紹介したいと思います。仙洞御所庭園と南禅寺金地院庭園です。この二つの庭の場合は記録が残っていますので、確実に小堀遠州が設計したと言える、珍しい事例です。

仙洞御所は後水尾上皇のためにつくられた広い池庭です。小堀遠州が描いた図面が残っていますので、作られた当初の姿を知ることができます。その

後は何度も改造され、池の護岸も作り直されましたが、真ん中にある出島やその周辺の石組みはほぼ図面通りに残っています。

金地院の庭は全く違う雰囲気ですが、この場合も起こし絵図が残っているすし、当時の住職であった以心崇伝の『本光国師日記』には庭が出来上がるまでの過程が細かく書かれています。ここで小堀遠州は禅宗寺院に合った枯山水を作りました。「鶴亀の庭」として有名ですが、左に亀、右の鶴、真ん中に蓬莱山の石組みが配置され、非常に写実的な表現です。こうして、小堀遠州は当時の有力者のために建築や庭を作りましたが、貴族・僧侶・武士などと依頼者の立場や、宮殿・寺院・城廓などという環境にふさわしい庭を設計したわけです。

その小堀遠州について二つの伝記がありますが、二つとも日本庭園の歴史家によって書かれたところが興味深いです。重森三玲が戦後間もなく、1949年に『小堀遠州』を出版しました。その約20年後の1967年に、今度は森蘊が同じ題名で発行しました。この二つの本は、小堀遠州の幅広い活躍を知るための貴重な参考文献で、今でもよく引用されていますが、その中で重森三玲と森蘊は全然違う小堀遠州像を描いています。まずは重森三玲が小堀遠州をどのように紹介したのかを見てみましょう。

「(前略) あくまでも人間としての自個の力を信じた彼であり、人間の行為が、あらゆるものを制服することによって、自然も亦作り得ることを信じた彼であった。だから、藝術の上に自然を生かすことは、自然を模倣したり、あるがまゝの自然に従ふ必要はないと信じてゐた。作者の創作力によって、別な角度から、大きな自然を生み、又は自然を発見することが出来ると云ふ自信をもってゐた。この様な點を理解せぬ限り、遠州の藝術に對して理解し難い點があると言へるであらう。」(181頁)

重森三玲にとって小堀遠州の庭は、人間がつくるもので、デザイン性の強

いものである、と。自然を生かすのではなく、自然を超えるような芸術作品であると高く評価しているわけです。それに対して、森蘊は小堀遠州の庭をどう評価したのでしょうか。

「遠州の庭園の意匠は自然順応にあった。それは平安時代庭園の秘伝書である『作庭記』に力説してあることであるが、遠州はまた平安時代の庭園作家たちの理想であった自然風景の利用も得意であった。」(196頁)

森蘊にとって、遠州の庭は自然を超えるのではなく、借景という自然の風景を生かすような庭であった、と。江戸時代に作られましたが、平安時代庭園に通ずるものがあって、森蘊は高く評価するわけです。こうして、重森三玲と森蘊は同じ資料と庭園を分析した結果、正反対の解釈に至りました。二人とも小堀遠州の庭を絶賛するのですが、絶賛するポイントがズレています。つまり、二人の庭園観・美意識がまったく異なっています。どちらが正しくて、どちらが間違っているのか、私にはわかりません。日本庭園史の研究をする立場からは、良し悪しを判断するより、そのズレこそ面白いと思います。

今となっては「日本庭園の見方」という本がたくさん出版されていますが、私たちは日本庭園をどう見れば良いのでしょうか。その歴史と美意識をどう解釈し、どう理解すれば良いのでしょうか。私はそんなことを考えながら研究を進めています。以上です。ご静聴ありがとうございました。

参考文献：

重森三玲『小堀遠州』河原書店 1949

白幡洋三郎『江戸の大名庭園―饗宴のための装置』INAX ALBUM 1994

森蘊『小堀遠州』吉川弘文館 1967